

地上げや日誌

地上げの手口教えます

目次

登場人物

プロローグ

中松氏登場

中松氏相手に孤軍奮闘

中松氏相手に孤軍奮闘二

中松氏相手に孤軍奮闘三

貼紙「面会謝絶」をめぐる攻防

エピソード

後日譚

登場人物

鬼頭元和 元の家主

元岩 明 元の地主

三木 実 現在の地主で家主

大泉明彦 不動産屋

(イチイハウ

ジング代表)

小田正幸 不動産屋

(イチイハウジ

ング北店店長)

中松聖二 解体職人

天野 弘 大学の先生

天野ジゼル 弘の妻

天野公 弘の妹

二見勉 弘の義弟

二見洋子 弘の妹

島木さん 路地奥の借家人

田沼さん 東隣の借家人

広国弁護士

藤井警部補

元山巡査部長

京都反原発すずめの学校会員

江崎・飯間・山塚諸氏

友達

河中・魚住・古葉・鳥さん

プロローグ

一二月三〇日

一九九八年も押しつま

った一二月三〇日に、例

年通り家主の鬼頭さんが、

お歳暮のお返しにスグキ

を持ってやってきのが、

すべての始まりであった。
その折に、

鬼頭さん 「もうそろそろ
返すことにしたんで、お
宅も必ずもりしといて」

弘 「いつごろから？」

鬼頭さん 「二月」

弘 「……」

要するに、私たちが借り
ている木造二階建て瓦葺
の家は借地上に建ってい
て、家主が借りている土
地を返すので、「家はどう
なるかわからん、あとは
先方と直接交渉してく
れ」ということであつた。

二月と聞いて、「まあ、その頃からぼつぼつ話が始まるのだらう」と高を括っていた。それでも、正月を目前にひかえてうっとうしい話である。

路地奥の島木さんと東隣の田沼さんにも、同じ話がいっぺいしていると思つて

尋ねて見ると、両家とも御存じない。一月末に、二月の家賃を払いにいった時も、特にそんな話が出なかつた。ということはそのんなに切羽詰まつたことではないだろう。後で聞いた話だが、島木さんと田沼さんは、二月の

家賃を払いにいった時に、
家主が変わると云われた
という。

二月二三日

二月の最後の火曜日、
二三日に不動産屋から電
話がかかる。

「イチイハウジングです
が……、
ジゼル「ハウジングなら
いいません」
ガチャン。

リン、リン。
「鬼頭さんから家のこと
で……」

ジゼル「しよつちゆう、
家を買わないかと電話が
かかってくるんで、すい
ません。ハイ、なんでし
ょうか」

「イチイハウジングの小
田というんですけど、家
主が変ったんで明後日の
二五日に家賃をもらいに

いく。当日電話してから
うかがうから」

ジゼル「主人にそう伝え
ておきます」

弘は「京都反原発すずめ
の学校」の定例学習会で、
夜遅く帰ってきてこのこ
とを知らされる。

二月二十四日

翌日さっそく鬼頭さんに電話をして確かめる。そのとき「家屋の売買契約をした、五月末に引き渡すことになっている」と聞かされる。「そんなら、三月分の家賃は従来通り、持参したいけど」と申し

出る。

二月二十五日（木）

妹の公に、法務局へ行
ってこの土地と家屋が
どのように登記されてい
るかを調べてもらおう。土
地は元岩明の名義であつ
たが、以前と違って一億

一千万の抵当権設定の仮登記がなされていた。家屋については今まで通り鬼頭元和の名で登記されていた。

昼過ぎ自宅に小田から電話があり、八時から九時の間に来てくれるようジゼルが返事をしたが、

七時過ぎに再度電話があり、一〇分程したらいき
たいといふので承知する。

七時半過ぎに二名の紺
のスーツ姿の恰幅の良い
男がベルを鳴らしてやつ
てきた。玄関内に入れは
したが、立ったまま話
す。寒い中、たたきに立

ったままで対応したのが
気に入らなかつたようだ。
他の二軒では家に上がつ
てこたつにでも入れても
らつたのか、後日「天野
さんの所だけは家に上げ
てもらえへんかつたし」
と小田がぼやいていた。
名刺をもらう。ずんぐり

とした脂ぎった五〇代の方
方がイチイハウジングの
代表で大泉明彦という。
それより一回り大きい若い
男がイチイハウジング
北店の店長で、小田正幸
という。電話をかけてきた
男である。大泉がドスの
聞いた低い声で話し始

める。

大泉 「家主が変わった。

地主さんが家を建てて住
みたいので、出て行って
ほしい」

弘 「そんな話、家主さ
んから聞いてへん」

大泉 「変わったんや」

「変わった」、「知らん」

で押し問答、小田が鬼頭
さんに電話をいれる。お
通夜で不在のため決着が
着かず。

「鬼頭さんから家主が変
わったことをはつきりさ
せてもらい、そのうえで
あんたらが新しい家主の
代理で家賃を集金に来た

ことを証すちゃんとした
ものがあるれば家賃は払う。
立ち退きの話はそれから
のことや」と理路整然と
話し、「しゃべるのはプロ
やで」とか何とか茶化す
と、相手も黙っていかない。
「追い出すことにかけて
は、この道三十年のプロ

「や、勝負しようやないか」とドスをきかす。

初体面のどこの馬の骨とも分らない輩にハイハイと家賃を払う人がいるとでも思っているのだろうか。今日はともかくお引き取り願った。

二月二十六日（金）

早朝の八時過ぎに鬼頭
さんの家へ飛んでいき、
丁度出勤されるところを
つかまえる。

「地上権を放棄して、家
屋を買ってもらう契約を
した、その中に家賃を代
わって集金してもらおうと

いう一項が入っていて、
それは便利だと思ったん
でそうしてもらおうことに
なった」と云われる。「そ
んなら、今、直接持って
きてるんやから、受け取
ってくれないか」という
と、簡単に受け取って、
いつもの通い帳に領収印

を押してくれた。何のこ
とはない、まだ鬼頭さん
が家主ではないか。昨日
の話はいつたい何なのか。
さっそく小田に電話をし
て「受け取ってくれはっ
たで」と云うと「誰に」
とびっくりした声が返っ
てきた。「鬼頭の主人に」

と答える。

小田「今日、いはった？
電話しますわ」とあわて
て切る。

夕方、七時前に家主の
鬼頭さんから電話で「家
賃をかやしにいく」とい
ってくる。八時過ぎに今
度は小田からすぐにでも

会いたいといってくる。
こちらは家主が変わって
いないのだから会う必要
がないと思うが、しつこ
く要求するので月末は東
京出張で忙しい、来月の
初めにでも、とのらりく
らりと引き伸ばす。

九時に家主の鬼頭さん

がやってくる。「家賃は大
泉の方に払ってほしい」
といわれるが、なぜ鬼頭
さんでは駄目なのか納得
がいく説明がない。彼も
どうしたらいいのか分か
らず、「不動産屋に話して
みる」といって帰ってい
かれた。

二月二十七日（土）

昨日で家賃の件は終わったと思いきや、昼の一
二時過ぎに、今度は小田
が家賃をかえしにいくと
電話をかけてくる。ジゼ
ルが電話に出て「主人は
東京出張で、二八日は三
重へ回って夜遅くなる」

と答えると「留守やった
らポストに入れておく」
と行って、どうしても鬼
頭さんが受け取った七万
円の家賃はかえすという。
まさかと思うが……
留守中に公がやってき
て、格子戸の隙間から玄
関前に小田が投げ込んだ

であるう七万円入りの封筒を発見する。ポストに入れずに無造作に投げ込んでおくとは！

以上が発端となった「小田の七万円入りの封筒事件」のあらましである。

他の二軒、島木さんと田沼さんは、大泉と初体面の時にはさすがに三月分家賃は支払われなかつたが、この二軒の家賃は月末までにきちんと新家主の金庫に収まっています。わが方の七万円は宙に浮いたままである。島木さ

んに領収書を見せてもら
ったところ、新家主は『東
洋住宅販売 三木 実』
となっていた。登記上の
地主は元岩明であつたか
ら土地売買に絡んでやや
こしくなっているなあと
感じる。

宙に浮いた七万円をど

うすればよいか、今後の
立ち退きのことも含めて
一時間五千円の『弁護士
相談』と「また、結果次
第で相談しに来て下さ
い」といって無料で家賃
供託のサンプルまで書い
てくれた『借地借家人組
合』を訪れいろいろ教え

てもらった。その結果、
ともかく三月分家賃は鬼
頭さん宛に供託すること
にした。

立ち退きに関しては、
借地権がなくなっていれ
ば不利な立場になるが、
そうでなければ問題はな
いという。例えば、「元岩

明所有のこの土地を、イ
チイハウジングか東洋住
宅販売かが借りたことに
して、借地料を払わなけ
れば借地権がなくなり、
そうなればその土地の上
の家に住んでいる人は出
ていかなければならな
い」というのが法律であ

る。このように素人にも
分かりやすく具体的に説
明していただいたのは
『借地借家人組合』の方
で、『弁護士相談』は不親
切な説明であつた。不親
切なだけでなく、誤つた
アドバイスもあつた。供
託の宛先を鬼頭さんにす

るのか三木実にするのか
を尋ねたとき、宛先なし
でも法務局は受け付ける
といわれたが、それはで
きなかつた。それができ
るのは家主が死んで相続
が確定していないような
場合だけであるというの
が法務局の見解で、それ

でこちらで判断して鬼頭
さん宛にしたのである。

鬼頭さんから三月分家
賃の領収印はもうすでに
もらっているから、鬼頭
さんが、供託された家賃
を引き出されるわけはな
い。宙に浮いた七万円は
結局、こちらが引き出さ

ない限り国の金庫に収ま
ったまま、当時は年に
なにがしかの利息がつく
安全な貯金であつた。

三月二日（火）

一五時過ぎに小田から
自宅にまた電話がかかっ
てくる。「家賃は天野さん

から直接受け取りたい。
鬼頭さんからではこまる」と云う。ジゼルが「家主が変わったという証拠を見せてくれたらいつでも払います」と答えると、小田は「信頼してください、い、信頼……」というだけ。

一九時半過ぎ小田から
また電話。

小田「家賃は、かやした。
格子戸の隙間から入れと
いた。ポストやと盗まれ
るかもしれへんし、戸に
は鍵がかかっていて、真
つ暗で留守やったんで」
弘「そんなん知らんで、

落ちてへんかったし、新家主が誰かというちゃんとした証を鬼頭さんからもらって、七万円かやしてもろうたら払う」

小田「金は持ってきて入れといたっちゆうのに。鬼頭さんの、三木が新家主であるという一筆と、

それにいつもの家賃領収
印を押したものの、三木が
新家主であるとしたため
た書類、そして三木から
委任状をもらってくるか
ら新家主の三木に三月分
家賃は払ってくれ」
弘「まず七万円かやして
もらわな。今ゆうた書き

つけは、内容証明書留郵便で送ってくれ」

電話ではらちがあかず、今からそちらへ行くという。どこにいるのかとたずねると、二筋北の萩公園にいますといってすぐにやって来るようす。歩きながらまだ電話を離さず、

「あっ、恵美幼稚園なくなってるやないか」と絶句して「妹が行ってたんや」という。恵美幼稚園はこの界隈の古い幼稚園で弘もこの卒園者である。界隈の集会の場所でもあったが、残念なこと、ここもマネーゲーム

の犠牲となつて最近更地になつたところである。小田は、昔一筋北に住んでいたという近所の人の話と合う。よく聞くと「洛北高校や、当時は葵少年サーカークラブでならしたもんや。高校卒業して引越した。大阪の不動

産関係の専門学校へ行って、おやじの口利きで大泉さんにやとつてもらった」といいながら、結局わが家の前までやってきた。門口で立ったままで雑談を続ける。

彼は、今は結婚して大原に家を建て住んでいる。

一子の父親、もうすぐ二人目が生まれるという。 「おやじのことは知ってはるやる……」と身の上話を始める。小田一族は幡枝の大地主で叔父は元々の顔役で名士、ボーリング協会の会長とか、社会的な肩書きが多いと云

う。

「それに引きかえおやじ
は、どうしようもない奴
で、大きな家取られてし
もうて、北園町の借家へ
引っ越してきたんや、そ
こも追い出されて岩倉の
方へ引っ越した」
それで大きくなってから

仕返しをやっていゝるわけでもあるまい。ともかく葵小学校、下鴨中学校、洛北高校と小中高の後輩である。三〇過ぎたところだから、私たちがこの家に住み始めたころ、北園町界隈を走り回っていたガキ達の一人である。

この大先輩に対して「奥
さん、フランス人やゆう
ても、あの口の聞き方な
んやね。いりません、ガ
チャンやで、もうちよつ
とましな言い方あるやろ
に、あなたの躰が悪い」
とほざく。

小田「さっきゆうたはっ

た内容証明郵便は送れへ
ん、鬼頭さんが判子をつ
いたもんを持ってくる。

昼にその紙は奥さんに預
けておいたんで、これか
ら取りに行く」といつて
鬼頭さんに電話をかける。

弘も鬼頭さんに

弘「小田がきて家賃払え

と
い
っ
て
い
る
。
私
の
払
っ
た
七
万
円
は
ど
う
な
っ
て
る
ん
で
す
ね
」

小田にかわる。

小田「今、そんな金もつ
てへん」

結局、小田が七万円を猫
婆した雰囲気になつてき
て、三月五日の金曜日に

鬼頭さん連れて再訪する
と云うことで今回は決
着する。

五日の予定は先方の都合で六日に延びる。また次の週の九日（火）に今後のことを話し合うことになる。それまでちよっ

と日が空き、今後のことを
をいろいろ思い巡らす。
どうせいつかは立ち退
かねばならないだろう。
立ち退いた後は更地にさ
れるだろう。木造二階建
て、築六〇年以上のこの
家はまだまだ住めるが、
私たちを除いて誰も住み

たがらない。勿体ないはなしである。住める家を潰すのは、大げさにいえば国家的損失である。実際、旧来の借地・借家法ではそのような解釈から借家人を保護している。従って、家主が住む家がない限り追い出せない、

ましてや、金儲けや自分の借金の後始末のために追い出して、まだ住める家を潰すというのは法外である。法外でも双方が納得すれば問題はないが、第三者から見れば勿体ないことが多い昨今である。

真新しい家や立派な旧家

がどんどん潰されている。
こんな世間の風潮に棹さ
すため、より広い立場か
ら立ち退き反対運動を旗
揚げすることもできよう。
しかし、時間的余裕さえ
あれば、引っ越せないこ
とはないから、その様な
大義名分で肩肘はって居

続けるのも面倒だ。時間
稼ぎをやりながら、この
世の中まだちよつと骨の
ある人も居るのだと云う
ことを、地上げ三十年の
プロに思い知らせてやる
う。それに、ここに引つ
越してきた頃、まだ小学
校にいくかいかない年だ

った者に追い出されるのも癪だ。

解体工事が始まる時のことを考えて、土地収用に抵抗するのによく利用される立木権のことが頭に浮かぶ。ジゼルの名前で裏庭のアボガドの木の名認をする。

「この木は天野ジゼルの
ものであるから、許可な
く伐採するな」と云う札
を、種から芽が出て直径
十センチ以上にもなつた
アボガドの幹にぶらさげ
る。そして、これまたジ
ゼルの名前で、京都新聞
の読書の声欄に投稿し、

「地上げやが突然やってきて、出ていけという。あとは更地にするというが、私の大事なアボガドの木はどうなるのか」と訴える。この投書は一日に掲載され、知人の何人かが見たと知らせてくれたが、特別な反響はな

い。ただ以外だったのは、
近所の人「アボガドの
木ってどんなもんか、見
たことがないから見せて
くれ」といつてこられた
ことである。

三月六日（土）

夕刻の六時過ぎ、小田

から電話で「鬼頭さんか
らも委任状をもらったん
で、七時まで一人でい
く」と云ってくる。すぐ
に鬼頭さんに電話して確
かめるが、居留守を使わ
れる。まずおばあさんが
電話に出て「耳が遠いの
で聞こえません」という。

そんなら電話に出なければと思うが、いったん切って再度電話をする。今度は息子が出て「両親はいない」と賢く返事する。鬼頭さんも立派な息子さんを持って幸せなことだろう。もうこの件に関してはおかかわりたくないの

は分からないでもないが、
四半世紀もの大屋と店子
の関係はそんなものでは
ないはずだが。おじいさ
んなら、頑固ではあるが
こんな対応はされなかつ
たと思う。

正確に七時に小田来訪、
今回は玄関に座ってもら

って、次の三つの書状を受け取る。

(一) 鬼頭さんの代りに小田が「賃貸人変更のお知らせ」を届ける旨を書いて署名捺印した鬼頭さんの書状

(二) 鬼頭さんからの賃貸人変更のお知らせ

(三) 三木実の委任状

小田が猫婆したことになる。なっている金の話は次回九日二〇時からにしよう。ということ。今日はお引き取り願った。九日まで、いづれは始めなければならぬ。であろう。立ち退き交渉に挑むための準備

備をする。

借地借家人組合に電話して、立ち退き交渉についてアドバイスをもらおう。

「立退き料に相場はない、力関係です。居座るとい
う態度で挑むこと、こちら
らの希望条件を先に云う
ことはない」と明快な答

えであつた。

時間もとられることだし具体的な立退き交渉自体は弁護士を頼もうと考えて、「すずめ」の江崎氏に知り合いの小宮総合法律事務所の広国弁護士を紹介してもらおう。すぐ連絡し三月一日の約束を

得る。次回九日の小田と
の話し合いには間に合わ
ない。そのときは三月分
の家賃のことだけにして、
立退き交渉は一日以降
に延ばそうと思う。

新家主もはっきりした
ことだし、もう悪い冗談
はやめて三月分家賃は小

田に払ってやろうと決め、
日本銀行から七万円を引
き出す。

三月九日（火）

夜八時二分にやってき
た小田は、「正確でっしや
る」といつになくリラッ
クスした態度でやってき

た。もう七万円をあきらめたのか、あるいは「天めたのか、あるいは「天野さんの悪い冗談だ」と見抜いたのかたいへん機嫌がいい。先手をとって、「先日もらった書類で、三木さんが家主とはつきりしたから、今ここで七万円あんたに払うわ。私

が、鬼頭さんに直接かや
してもらいにいく」とい
うと、鬼頭さんにこちら
から二重払いを解消しに
いくのは嫌がり、この場
で二月二六日付けの三月
分家賃の三木実の領収書
を渡すから、鬼頭さんの
領収印は破ってくれと要

求する。七万円の件は「天野さんの悪い冗談だ」と確信している様子なので、あっさりと引き下がり鬼頭さんの領収印を破ることにする。いざ家賃の通い帳を出すという段になつて、それが見つからない。家捜しするもどこに

もない。大事にとっておいたため、かえってその隠し場所を忘れてしまったのである。

見兼ねた小田は、次に会う時でよいと提案してくれた。彼もその方が会う機会ができて都合がいいのだらう。七万円は今

回も支払わずじまいとなる。

次回の日程を三月一六日（火）に設定する。先方はいつも火曜日を提案してくるのは、翌日の水曜日が休みの関係だろうか。小田は「二ヶ月後に立ち退けば、立退き料は

払うが、六ヶ月後ならな
にもない」といつて帰っ
ていった。この提案を聞
いて、四月末か、八月末
までに出ていくといえ
ば、これからの冒険話はな
かったことだろう。

三月一日

小宮総合法律事務所の
ドアをノックして、広国
弁護士にこの立退き交渉
を引き受けてもらうこと
になる。三月一六日の約
束もキャンセルして今か
らすべてを広国弁護士に
任すことにする。手付け

金一〇万円、一割の成功報酬。先方の金儲けの勝手な都合に見合う立退き料として、こちらは停年までの家賃の差額プラスαを要求したい旨を伝える。月一二万の家賃として月五万が差額、年間六〇万、停年まで八年であ

るから、

五×一ニ×ハ＝四ハ〇

万と算盤をはじめ、これを最低とし一千万円をこちらの要求額とした。後はタイミングを見計らって小田に電話を入れて、こちらにも代理人を立てたこと、三月一六日の約束

も、家賃支払いの件も代理人を相手にやってくれと伝えることである。

三月一六日

朝一の時きっかりにイチイハウジング北店に電話をし、「店長の小田さん」を呼んでもらう。「お

はようございます。天野
ですが、今日の話ですが、
こちらも交渉事をやって
もらえる代理の人を頼ん
だんで、すまんけど、そ
ちらの方と連絡をとって
もらえへんやるか。名前
は……」と一方的に広国
弁護士に振ってしまふ。

「交渉事をする人」とい
って「弁護士」とはいわ
なかつたため「不動産屋
か？」と聞き返してきた
が、あくまでも「交渉事
をする人」で押し通した。
これが先方にどのような
心理的影響を与えたか興
味あるところだ。

三月二五日に大泉が広
国弁護士に会って三月分
家賃を受け取っていった。
四月分家賃は三〇日に小
田が家にとりにきた。そ
の時「弁護士さんなら、
弁護士とゆうてくれはつ
たらいいのに……」と何
度も繰り返していた。弁

護士に振られるとは以外
だったのか。

四月三〇日

四月は比較的平穩無事
に暮らせた。

大泉が広国弁護士に
「他の二軒とは話がまと
まった。田沼さんは四月

中に引っ越される。一五〇万でまとまった。天野さんの方の条件は「と聞いてきたので、本格的な立退き交渉を前に、広国弁護士との打ち合わせを二二日に事務所でもった。聞かされていた通り、田沼さんが引っ越す。

同じ日に小田に電話で五月分の家賃の集金を頼む。いつもと違って相当頭にきているようで「無茶な要求するな」と突っかかってくる。先方の要求に答えて、広国弁護士からこちらの希望条件をしたためたファックスが

届いていた。「大事な内容
に對して、フアックスで
答えるとは何事か」とこ
のやり方も気に入らなか
ったようだ。後日大泉か
ら聞く。

集金日については何も
指示されていなかっただよ
うで、また一度電話をす

るといって、夜の十一時
にかけてきた。「滋賀県に
おりまんっね」と管を巻
いている。切っても、切
っても電話のベルを鳴ら
す。電話機のベルに細工
して音が響かぬようにす
る。

五月二日

イチイハウジングは五月一日から六日まで長い連休である。五月分家賃を支払っていないだけにちよつと不安。

小田から電話、三木と連絡がつかず困っている様子で、相当しつこく「こ

けにされて腹がたっ
てい
る、連休中に一度個人的
に会いたい」と要求する
が取り合わず。

五月三日

また電話、「三木と連絡
がつかない、今日はいけ
ない、連絡がつき次第ま

た電話する」と云い、突
然「鬼頭さんの領収印は
どうなった」と聞いてく
る。今日来る約束もなか
ったしこちらは面喰らう。

五月七日

今度は真面目な電話。

「今晚五月分の家賃の領

収書を三木からもらうか
ら、明日伺っていいか」
と丁寧に話してくる。こ
ちらは「明日は都合があ
らない、九日の夕方七時
ごろはどうか、無駄足に
ならないように電話して
から来てくれ」と頼む。

五月九日

朝に三木実から、「賃貸
借契約を解除するから即
刻明け渡しをするよう
に」との通知書を内容証
明書留郵便で受け取る。
それなのに今晚家賃をと
りに来るといふのはどう
いうわけか。論理破綻も

はなはだしい。小田の独断か。

夕刻の七時に電話があり、夕食を終えたとたんに小田が現われる。内容証明書留郵便のことは尾首にも出さず家賃を支払う。領収書を子細に見ると「四月分」となってい

る。ちよつと危険だと思
ったが、その場で小田の
手で直させる。この時は
気がつかなかったが、あ
とから考えるとこの七万
円は小田のポケットに入
った気がする。三木の方
は賃貸借契約を解除した
といているのだから五

月分の家賃を貰うわけには
いかないはずである。

連休が終わってからの
五月はしばらくの間平穏
であつた。買うことも考
慮しているいる物件を当
たつてみたが、適当なの
はない。そんな中で、友
達の魚住さんの住んでい

る家が空くのでそこはど
うかという話が進展した。
空き家になる時期が十二
月末から九月末に早まっ
たのである。さっそく家
主さんに電話で貸してい
ただけるかどうか聞いて
貰う。オ―ケ―だという
ことでこちらからも電話

する。礼敷なしの月三万
円、大きさは今の半分以
下であるが、確保してお
いても損はない物件と思
って借りることに決定。
さあ、九月末までが
ばれるか……

中松氏登場

五月二一日（金）

夕方四時頃 ジゼルが、
大泉風体の男が路地をう
ろついていたり、田沼さ
んが引っ越した空家のな
かで何か音がしているな
ど、ちよつと妙なことに

気付く。

七時頃 路地奥の島木
さんの奥さんが前の田沼
さんの家に電気が灯って
いると知らせてくれた。
夜の八時過ぎに引越
始まる。洗剤のアタック
を持った小柄な丸坊主の
男がやってくる。「中松と

います。自分は耳が遠
いんで……」

一筋北の弘の実家に住
む妹の公が『居着きのま
ま高く買います』という
キヤッチフレーズが入っ
たイチイハウジングの広
告を持参する。何か嫌な
予感がする。

この日は何事もなく終わる。

五月二二日（土）

六時に目覚めて便所に
いったところ、いつにな
く、隣のテレビの音を耳
にする。新しいお隣さん
と直感。

七時 演歌始まる。異
常に大きい。

七時半 朝食を中断し
て抗議に出る。先方もち
ようどわが家にやってく
るところで、「風呂は近所
にないか」が口実。適当
に答え、騒音のことで激
しく抗議する。彼の東隣

りの主人もあらわれ、空
き家と置いていた家に人
が住んでいるのにまずび
つくりし、「あなたは、ど
ちらさんですか？」とて
いねいに尋ねておられる。
二人で「閑静な住宅地で、
何ということか、非常識
きわまりない」と抗議す

るが、先方は耳が遠いと
か何とかいって引き下が
らず家に入ってしまう。

八時過ぎ 仕事に出か
ける様子で、わが家にや
って来て「自分は一人暮
らしで、箆笥貯金をして
いるので泥棒が心配、音
楽は鳴らしはなしにして

おく」とのたまう。車の
エンジンをかけ出発しよ
うとするので、「俺が留守
番してやるから鍵を渡
せ」とくいさがるも強行
に車を発進させる。発車
間際に、ちよつと触る程
度に彼の腕に手をかける
と、小さなまんまるい目

を精一杯むいてすごむ。
昨日、島木さんのご主人
の職場に小田から電話で
「職人を一人住まわせ
る」と連絡があったとい
う。夜に帰宅したとき、
もうすでに電気が灯って
いるのでびっくりしたと
のこと。当方には何の断

わりもなかつた。わが家
がターゲツトであること
が分かる。

昼の一時頃 お隣さん
の二階の窓に日の丸がは
ためいているのに気付く。
中松は植木の手入れをし、
切った枝葉を燃やしてい
る。煙がモクモクとたつ

ている。外に出ると、中
松が「あんとたところの垣根、
道へはみ出ている。路地
奥の木もうっとうしい。
切らはったら」とおせつ
かいなことを云う。
弘「もうそろそろ垣根の
ウバメガシは剪定しなあ
かんと思っっているところ

や。暇なときにやるわ。
ごちやごちやいいなはん
な。路地の木はうちのと
違うで」

中松「自転車とめてはる
ところ、駐車場に貸さへん
か」
弘「いやや」

妹の公がやってきて話

の輪に入る。公、日の丸
に目をやって

公 「今日は祭日？」

中松 「いいや」

公 「ご趣味ですか」

中松 「天皇、崇拜してる
んや」

と小声で答える。そう云
えば、右翼ということ

こちらが恐がるだけでも思
ったのか。近所の人の話
だと「日の丸と軍歌だけ
ですぐ立ち退くひともい
はる、それがふつうえ」
とのこと。こちらは「天
皇崇拜、結構なことです
ね」

夕方六時頃、家のベル

を鳴らし、しつこく呼ぶ
が、答えず放っておく。
音楽をかけたまま車で出
かける。

電話がかかってきてジ
ゼルが応対。一回目は「主
人はいません」で切る。

またすぐベルがなり、
ジゼル「日曜日の夜まで、

あなたのお仕事もたいへん
ですわね」

中松 「口のききかたが
悪い」

ジゼル「そのいいぐさは、
もう小田さんから聞きま
した」

というような言い合いが
あった。

五月二三日（日）

六時四〇分 中松が水
まきをしているのを目撃。

八時半 弘はウバメガ
シを剪定。切った枝葉は
駐車スペースに積んでお
く。だいたい終わったと
ころで中松があらわれた
ので、昨晩いなかったこ

とを釈明して話の糸口を
つくる。個人的な話をし
ながら探りをいれている
ところへ突然、小田が血
相変えて車で駆けつけて
くる。三者間で一悶着あ
ったが結局、中松が小田
にこっぴどくいわれ引き
下がる（芝居か？）。小田

のいうことによると、中
松が、昨夜のジゼルとの
電話で、小田がこちらと
もめていると誤解して三
木に電話を入れ、小田が
三木に怒られたというこ
とらしい。小田は弘に「三
木に何でわしの悪口いう
んや」とつつっかかってく

る。三木に直接に話した
ことはない、発生源は中
松の電話であることを了
解させる。そのあとはな
ごやかに家を買うとか、
売るとかの話にもってい
く。以前に聞いた松ヶ崎
の家に興味がある風を装
う。この家は府会議員の

娘夫妻と足の悪い娘が住んでいて、近々下鴨中学校の近くに引っ越したいので売りに出ている。三千九八〇万、二八坪。今日はあまり話に乗ってこない。日曜日で一〇時からのオープンハウスで彼は大忙し、九時半頃に引

き上げる。六月分の家賃の集金日については月曜日はこちらから電話を入れることになる。帰り際、後ろに引っ込んでいた中松が、車に乗り込むところの小田に「あの自転車置いてはるとこ、不法占拠と違うか。三木さんは

あの部分は貸してへんつてゆうたはる。自分が借りたい」と訴えている。小田と中松はどういう関係か？

中松はその後一五分から三〇分間隔でベルを鳴らし「天野さくん、天野さくん」と叫んでいた。

一度は「……のことで腹
たつてんや」といつてい
たが意味不明。結局一
時半頃あきらめて出かけ
る。

夜はボリュウムいっぱ
い軍歌と演歌がかわるが
わる町内中に鳴り響いて
いた。向いの家の息子は、

腕組みをして家の前に突
つ立って中松の二階の窓
をにらんでいる。寝られ
たものではないのだろう。

五月二十四日（月）

九時半頃、中松がわが
家の玄関の格子戸を叩き
叫ぶので、ジゼルが下鴨

警察署に電話して交番のものをこさせる。向いの家にも事情聴取があつた。これは、昨晚息子が寝られなかつたので電話されたとのこと。中松本人は不在。一〇時、ジゼルが電話をしたことを知らずに、

弘も職場から下鴨警察署
に電話をする。日の丸が
はためき、軍歌が鳴り響
いていることを強調する
と、警備課に回される。
とりあえずジゼルか公か
に接触してもらおうように
頼む。

すぐ警備課から実家の

公に電話があり、すぐにでも公宅で事情を聞きたい口ぶりだったので、公はジゼルを呼びに行く。

警備課から藤井係長（警部補）と元山主任（巡查部長）の両氏が実家にかかけつけ事情聴取が行われた。ジゼルも公も両氏に

対して大変良い印象を受
ける。地上げが絡んでい
ることは伏せておく。中
松を見かけたら連絡する
ようにといわれ、警察は
家主の三木実に接触しよ
うということになった。

以上のことは、後で電
話で、ジゼルと公から聞

いたことである。

弘は職場から続いてすぐ
小田に電話をし、二五日
七時半以降に六月分の家
賃を取りに来てもらうこ
とにする。

そうこうしているうち
に中松から職場に電話が
ある。電話攻勢の始まり。

こちらにも十分暇があり、好奇心もあいまってゆっくり話の相手をさせる。

駐車場の件は、こちらが三木に接触するから電話番号を教えると要求するが、自分は親方の船津に頼んでもらっているというので、それじゃ親方

の連絡先を教えてくださいと頼むが、らちがあかない。昨日、小田に聞いておいてもらおうということになっているのでその返事を待つことで切り上げる。

垣根のウバメガシの件は、自分が切つてあげてもいいというので、三木

が切れというなら……と
口を濁しておく。

路地の木に関して私
のものではないと再度答
える。路地奥の人の名前
をたずねるから、自分で
直接たずねていったらと
つれない返事を返す。

昨夜九時頃わが家のベ

ルを鳴らしたというが、
これは大うそ。

犬は好きかどうか尋ね、
家のなかでは飼えない大
きな恐い犬を二匹飼いた
いという。

隣の家は一年契約で借
りたというので、こちら
は「町内会費を払え、ゴ

ミはちゃんと出さなあか
ん」など些細なことを問
題にし、騒音のことは一
切話さなかつた。

彼の個人的なこととし
て、五一、二才、解体職
人。いろいろあつたが、
差別で結婚もできなかつ
たともたす。今の教育が

悪い。競馬・競輪・パチンコと金廻りのいい時もあった、今どきのパチンコや音楽はおもろない。一回夜ゆっくり話したい、寿司でも持っていくわ、等々。

電話はどこかの事務所でかけている様子。他の

電話のベルが背後で鳴っているのが聞こえてくる。

「出んでもええんか」というと、「今日は休みや、ほっといたらええ」という返事。携帯電話は持たされていなのは不思議。

下鴨警察署の藤井係長から電話が入る。「中松本

人に接触したいから通報
をお願いする。はぐれ右
翼かもしれない。三木実
とイチイハウジングの電
話番号が知りたい」との
こと。

中松から再度電話がか
かってくるが、弘「会議
中でいらっしやいません

が「中松「隣の中松が電話したといつといてくれ」で今回は終り。

以上午前中の電話いろいろ。一〇時五〇分からゼミが始まるので電話の前を離れる。

一五時前に下鴨警察署の元山主任から電話。「三

木の方（本人とは云われ
なかつた）と連絡がとれ
た。だれからどんな通報
があつたのかと聞かれた
ので、ご近所の意識ある
人から、旗が揚がつてそ
の筋の音楽もなっている
との通報があつたという
ことにしといたから、そ

のようにわきまえておいて下さい」とのことであった。

ジゼルが中松を目撃して警察に通報したが、警察が来た時にはいなくなっていた。また、右翼の情宣車が軍歌を鳴らして中松の家にやって来て、

一人の男が車から降り立ち中松の玄関口を窺っているので、警察に通報したがすぐに出発してしまふ。後で知った話だが、右翼のあるグループが上賀茂警察署に電話してきた、「日の丸が揚がって、煙がたっているあれは何

や」と尋ねたという。別のグループの新しい事務所ができたのではといふかつて聞いてきたところと。

夕方帰宅後、元山主任から自宅に電話で、「明朝九時頃に中松を偵察にくからそのついでに北山

あたりの喫茶店ででも話を聞きたい」といつてこられたので二つ返事でオケオケする。

二〇時頃 いつの間に帰っていたのか中松が姿を現す。鞆を手にビニール傘をさし、わが家と自宅（？）の間を行ったり

来たり。最終的にベルを
鳴らし「天野さくん」と
呼んでから西の方に歩いて
去る。以外とちやんと
した身なりなのに驚く。

五月二五日（火）

朝は警察、昼は弁護士、
夜は大泉相手にくたくた

になつた一日。

早朝の六時に演歌を耳にし、覗くと中松が自分の家の植木を剪定し、切葉を集めてたき火をしている。警察が偵察に来ることになつていたので二階の窓から見張っている。七時四〇分に突然音楽が

止み、中松を見かけなくなる。

八時二〇分頃、警察の偵察が始まる。まず元山さんが西から歩いてやって来る。中松の家を窺い留守を確認し、向いの家に入る。その直後、藤井さんが同じように西から

歩いて来て中松の家を一瞥しながら東へ去る。しばらくして元山さんが向いの家から出てきて西に歩いていく。その後を引返してきた藤井さんが追う。しばらくして元山さんから「西にいったところではシルバ―の車で待

っているから」と電話が
かかり、前夜にまとめて
おいたメモを持って出か
ける。

車に同乗して北山通の
進々堂へいく。ここで初
めて立ち退き攻勢をうけ
ていることを明かす。家
まで送ってもらった帰り

際に、ジゼルが二階の窓から撮った弘と中松、小田の三人が輪になって話している写真を手渡す。

一二時半頃、広国弁護士に連絡、一三時の約束をとる。三〇分ほど待たされ、一五分ほど状況を説明する。それに対して

当方の立ち退き条件の一
千万をファックスで送付
したところ「二五〇万が
限度だ、自分達のやりか
たでやる」と弁護士との
話し合いを拒否したこと、
調停は相手から言い出さ
せるのがいいから、でき
るだけ接触を避けること、

ジゼルは里に帰して気長にやること、というよう
なアドバイスをもらう。

「それにしても今どきこんな地上げがあるのか」と驚いた様子であつた。

夕方、突然音楽のボリュームが上がつたので、二階から覗くと中松の他

にもう一人大泉風体の黒眼鏡をかけた男がいる。二人して自分の家の門に何か細工をしている。買物から帰ってきたジゼルも下鴨本通から二人を目撃し、直接帰らず実家に立ち寄る。最後にガンガンと何かを打ち付ける

音がした。警察に通報、
なかなか要領を得ないが
やっと話が通じて、車の
番号をひかえるようにと
の指示を受け、大急ぎで
「京四一け三九二四」
とメモする。警察が来る
前に車は出発。慥然とし
た顔で向いの奥さんと二

人で、警察の車が家の前
をゆっくりと通り過ぎる
のを見送るが、朝と同じ
場所に停車したのを見て
メモを渡しに行く。「音楽
が止んだことだけでも、
よしとしてくれ」という
ようなことをおっしゃる
ので、音楽が再び鳴り響

いているのを確認してモ
らうために、もう一度中
松の門前まで引っ返して
もらう。民事がらみで、
右翼関連が薄くなったの
で警備係の仕事でなくな
ってきたためか、昨日ほ
ど熱心ではない。

一九時過ぎ、六月分の

家賃を集金に来た小田の
声にジゼルが縁側から覗
いて返事をする。「二人、
来ている」というので用
心。確かに車のドアが閉
まる音が二回した。出て
みると案の定、小田の後
ろに大泉が控えている。
門の格子戸を開けずに格

子の隙間から家賃を差し出すも受け取らず。大泉が前に出てきて一人でまくしたてる。

「田沼さん引っ越されたし、島木さんも新しい家決まったし、もう近々引っ越される。天野さん一人残ってどうすんね。二

〇〇万で七月末が限度や。
これのまへんかったら家
賃はいりまへん。供託し
ていつまでも住んでなは
れ。空いている家に中国
人とベトナム人住まわ
す」
「三木さんはボランテイ
アで彼等の世話をしてい

る人で、なんぼでも集められる。月八千円で四十人位住まわせられるがな。そうなたら気持ち悪いで。いややなんていうたら差別になるし、困るで」
「となり引越してきたのは、ちよつと変わった奴で二回も別荘に入っ

ていたことでもある。ちよ
つと鈍うて、しばらくし
てからメチヤメチヤ怒り
だす奴や、他にも、もう
一人準備中やで」

「三木さんは府会議員や
警察に知り合いがある。
天野さんが通報したこと
ぐらいすぐわかる。警察

から何回も、何回も、電
話かかってきている。三
木さんはカンカンや。怒
ったら怖い人や。私たち
でも抑えられへん。警察
にすぐ電話して止めさ
し」

…

(同じことの繰り返し)

…

そうこうしていると、

大泉が小田に「ちよつと、隣、みてこうか」と呼びかけ、中松の家の方へ去る。弘は「ほな、さいなら」と云って背を向けて家のなかに入るが、その瞬間に音楽のスイッチが

入り演歌が始まる。何か仕掛けがあるようだ。しばらくして「天野さくんと叫んでから車に乗り込む音。うまく逃げられたとおもったが、金曜日（二八日）に電話を入れて再度会う時間を決める約束をさせられていた。

五月二十六日（水）

早朝五時四〇分ころから二階に陣取って偵察するも何の動きもなし。八時過ぎ警察に電話。藤井さんも元山さんもつかまらなかつたが、八時半に藤井さんから電話が

あり昨日の大泉とのやり取りのうち警察に関係ある部分を伝える。くれぐれも挑発したり、挑発に乗ったりしないよう注意を受ける。

ジゼルが島木さんの奥さんと立ち話をして、教え子の不動産屋さんの紹

介で大津に家を見つけた
が、八月中頃まで空かな
いので最終決定には至っ
ていないとのこと。この
ことを小田に伝えたとこ
ろ、本当の話かどうかそ
の不動産屋に聞き合わせ
がいったそうである。

九時に中松から電話が

自宅にかかってくる。「もう出かけた」とジゼルが返事するだけですむ。職場にも電話なし。

夜の九時前に元山主任から「事件性がないのでこれで打ち切る。民事には立ち入れない。何かあれば直接一一〇番してください

れ。窓口になれないこと
もないが」という電話連
絡をもらう。中松の身元
についてどの程度わかっ
たかと尋ねたが、はぐら
かされる。要するに右翼
の線ではなく、民事上のト
ラブルであることがはっ
きりしたので手を引く。

弁護士さんに相談しなさい。騒音では取り締まれない。騒音でけり。最初の日「やかましい」といっしよに抗議した東隣の人も警察関係の知人から「この程度の騒音では取り締まれない」と聞かされたとのこと。

五月二十七日（木）

昨日といい、今日とい
いたいへん静かである。

警察を動かしたことが少
しは効いたかと思いたい
が：：。

広国弁護士に電話をし、
供託をしておくこと、い

やがらせが続くようであ
れば差し止め裁判をおこ
してはという示唆を受け
る。

一三時頃に中松が帰っ
てきたのをジゼルが目撃
しているが、すぐにいな
くなつたもよう。音楽は
小さく鳴り始めた。

一三時四〇分頃、中松より職場へ電話。「二日ほど留守にしている帰ってきたんであいさつに電話した。家に奥さんいはらへんかったんで職場に電話したんやけど」とのたまう。また家にいくというので何のためかと聞く

と、

中松「町内会にも入らん
ならんし」と云う。

弘「留守やったら、別に
うちにこんでも隣や向い
にいつて聞いたらどうや
ね」等々ごちやごちやか
きまわすとあつさり引き
下がった。

一九時過ぎ、門灯の配線に細工をし、格子戸の裏に電気のスイッチが二つあるのを発見。一つは真新しい。二五日夕刻の細工がこれだったのか。これなら家に入らずに格子戸から手を差し入れて門灯を灯したり消したり

できる。

五月二八日（金）

夜中の〇時過ぎ 門灯、

一階と二階の電灯はつけ

っぱなし。音楽も鳴りつ

ぱなし。

六時半 水まきをしな

がら門口でうるうる。

七時二〇分 牛乳を取

りに出たジゼルと朝の会話をかわす。

ジゼル「主人は今さつき出勤したところや。旗が棒に巻付いて見苦しい。なおしたら」

中松「ハイハイ、六時前に出かけはったんか。今いたんやけど」

七時三五分 音楽始ま
り、いったん西の方へ歩
いていき戻ってくる。す
ぐにジャンパーを小脇に
抱えて出かける。

一〇時〇五分 二五日
の約束通りにイチイハウ
ジングの北店の店長小田
に電話するが不在。こん

なことは始めてで、ちよ
つと変と思う。要求しな
いのに携帯電話の番号を
先方から教えてくれる。
前には頼んでも教えても
らえなかつた。これも変。
二度携帯にかけるが繋が
らない。

一〇時半 小田から自

宅に電話がかかる。ジゼル「朝早く出かけた」と答える。

一〇時五〇分 自宅から小田の携帯に電話する。今回は繋がりに、弘「警察の件は私にはどうする」ともできない。七月末、二百万の件は、広国弁護

士の方には二百五〇万と
いっているやないか。こ
れはいったいどういうこ
とか、ややこしいから窓
口は広国弁護士一本にし
ぼる。もう今日わざわざ
会う必要はない」と伝え
ると、小田は自分一人の
判断で答えられず、「一時

間後にもう一度電話してくれ」と云う。弘はもう一度かけるつもりはないから「出先やから、できるかわからん」と電話をきる。

十一時頃 大泉から自宅へ電話がかかりジゼルが受ける。居留守がばれ

る。「イヤヨ」を回さなかつたため、先方の携帯電話話にこちらの自宅の電話番号が表示されていたのである。NTTもサービスの一つもりで罪なことをしてくれたものである。大泉は小田に伝えたことが不満でどうしても

う一度弘と会って話し
（脅し）たいようである。
彼は自分の携帯電話の番
号をジゼルに書き取らせ
ている。何度も聞き直し
て書き取っているジゼル
の様子をそばで見ている
ハラハラする。すぐ実家
へ避難しそこで一日過ご

す。

ジゼルがフランス行き
の航空券を手配しに京都
旅行研究会に行った時、
友達の古葉に会った偶然
あって、今晚鳥さんも一
緒にみんなで夕食をとも
にし、その足で彼らの田
舎の家で週末を過ごそう、

というような話が持ち上がる。三人して泊の荷物をとりに行った家に戻り、弘はコンサートホルルの前で待っているから拾ってもらおうことにする。

ジゼルが自転車を置きに家に帰ってきたところ、家の前に小田がいるのを

目撃し、とつさに引つ返して、荷物は食後にとりにいこうと思つたが、思ひ直して予定通りに三人して荷物をとりに行く。小田と一悶着。弘に会えないのが不満そう。話を切り上げ、荷物をとりに家に入つても、小田は

外でまだ待っている。家
から荷物を持って出て車
に乗り込む際に、小田も
あきらめたのか「ともか
く、おとうちゃんに電話
するようにようといてく
れ」とジゼルに云う。三
人は彼を無視して車を発
進させる。小田も自分の

車で後を付けてくる構え
だったので、下鴨本通を
北進して二筋目を左折し
てすぐ停車して様子を見
ると、案の定、小田の車
が曲がってくるが、やば
いと思っただのかすぐバッ
クしてそのまま北進して
消える。細道を曲がり曲

がりしながらゆつくりと
食堂の「かばの実」にた
どり着く。

実家に潜んでいた弘は、
ジゼルから一、二時間出
かけないほうがよいとい
う電話をもらい、しばら
く待って彼等の家に歩い
ていく。今日は遅くなっ

たので私たち二人は田舎
の家に行かないでここに
泊って、日曜日に日帰り
で遊びに行くことにする。
明日一日は彼等の家でゆ
っくり休養することにな
る。

ジゼルが必死で書き留
めてくれた大泉の携帯電

話の番号なので、明日ど
こかの公衆電話からその
番号を回して見よう。

五月二十九日（土）

昼前に阪急水無瀬の改
札口前の公衆電話から大
泉に電話するが、予想と
おり留守。留守番電話セ

ンタ―にメツセ―ジを吹
き込む。「昨夜は遅くなっ
たので電話しなかった。
小田から聞いてもらった
通りである。窓口を広国
弁護士一本にしぼる。話
があればそちらへしてく
れ」

大泉と中松は朝から昼

さがりにかけて家の廻り
で何かごそごそやってい
たようだ。公が何回か偵
察に行き、十時過ぎ、植
木の切りかすが家の前に
ちらかっていたり、十時
半には車が家の前に停ま
っており、中松が西角ま
で歩いて行って南のほう

を人待ち顔でうかがって
から戻ってきたり、十二
時過ぎにはジーンパンに、
Ｔ・シャツの大泉風体の
男がわが家の前でしやが
んで何かをこすっている
ようなかっこうを二度ば
かりして、中松の家に入
って行ったことなどを目

撃した。この奇妙な行動
は向いの奥さんも見てお
られた。一六時二〇分に
は歩道に乗り上げて駐車
させた車があり、後ろの
ドアがあけっぱなしであ
った。

五月三〇日（日）

朝十時のバスで友達の
田舎の家に向けて出発、
夕方一九時に京都に帰っ
てくる。二〇時に自宅へ
戻ってみると、門と玄関
の間に中松の手紙が落ち
ていた。公によると朝十
時過ぎにポストからその

手紙が覗いているのを発見、読んで元に戻しておいたが、一四時頃になくなっていた。広告と一緒にポストのなかに入ってしまったものと思っただけで、認せずにおいた。多分、私たちがポストを見ないと心配して、中松が格子

戸のすき間から投げ込んでおいたものと思われる。ノートを一枚破いた紙にしたためられたその手紙の文面は

「となりの中松やけどあんだ・とこのネコをかっている件で話があんにやけど連絡とりたいや。」

小田の七万円入の封筒
事件を思い出す。

五月三一日（月）

朝一番に、五月二五日
に受け取ってもらえなか
った六月分の家賃を供託
する。

夕方七時前に帰宅した

時、島木さんの奥さんか
ら、昨日路地奥の勝手口
から中松がわが家の中に
入るのを見た、と聞かさ
れる。丁度中松が車でや
ってきたので捕まえて詰
問する。

中松「連れてきた犬が猫
を追っかけて家にはいつ

たので、犬を連れ戻そう
として入たんや」

弘 「あほいえ、島木さ
ん、犬なんか見てはらへ
ん」

中松 「謝ろうと思っ
て表から呼んだんやけど、
出はらへんかったんで裏へ
回って入たんやけど：

：

弘 「なにゆうてんや、
このあほ。ともかくだま
って入たんやろう」

このとき、まだ勝手口
は開いたままになってい
た。入ったことを知られ
たくなかったら、目的（猫
を飼っている証拠をつか

むことだと、後日判明し
た）を達成後に元に戻し
ておけばいいのに、それ
をやっていない。どうい
うわけか。

一九時過ぎ、ガスが出
ないことに気付く。ジゼ
ルは東隣の人の所に中松
が犬を連れてきたかどう

かを確認かめにいった。確
かに二匹連れてきたそう
である。小さなかわいい
犬を。

その帰りに中松の家の
前に不審な車が停車して
おり、痩せ型の男が運転
席にすわっているのにジ
ゼルが気付く。弘も出て

様子を見る。どうもおかしい、寿司をつまみながら二階の窓から様子を見ている。三〇分しても何も起こらず車は去る。ほっとして、ガス会社に電話をかける。

電話中に大泉と小田が駆けつけてくる。居留守

を押し通す。家の廻りで
喚き散らしている。

「いるのは分かっている。

昨日もそやったけど、カ
ーテンに影が映っている
ぞ」(明らかに嘘)

「近所に迷惑かけるトラ
ブル・メーカー、正々堂々
と出てきて話し合え」(ど

つちが迷惑かけてるんや、
大泉はアメリカに建材を
仕入れに行くとか、それ
でかよく英語の単語を転
がす、一度はビジネス・
ランチというのも聞い
た。

玄関のガラス戸をドン
ドン叩き、うらの勝手口

から侵入してどなっている。家の前に停めていた三台の自転車を押し倒す。さんざんやった拳句に、二一時半頃、「小田君、帰るか」の一言を残し白いですそが広がった作業ズボンをはためかして、向いの家の前に停っていた小

田の車に乗り組む。二階
から見ていた弘は大泉の
かっこよさに目をみはる。
このとき中松もいた。
大泉は中松にも当たって
いる。

「警察どうのこうの、犬
や猫やゆうて、いちいち
電話するから忙しいのに

出てこんならん」

「警察にいわれたいうけど、あんた、わしにせんと警察に電話したら」

大泉と小田が帰った後も、中松は夜中の一時過ぎまで家の廻りをうるつき「天野さくん、留守か」と叫んでいた。

小田の声は少なかつた。

大泉に

「小田君、君も呼んだれ」

とはっぱをかけられていた。二〇時頃に様子を見た。にきた公が耳にしたのは「間に入ってわしらもこまってるまんね、出てきて話し合わはったらどうで

すね」。

脅しにはなっていない。

中松に対して「ナイセン
キツタ：：」と意味不明
のことを云っていたとの
こと。

いったいこれはどのよ
うなシナリオなのか。弘
が中松をぼろくそに云っ

て、彼が船津という「親方」に電話し、大泉か小田に連絡が入る。そして弘がいることを確認させてからやってくる。小田は二八日のように無駄足もあるが、大泉はちゃんとした目的を達している。

六月一日（火）

朝三時半に目が覚めて
外へ出て見ると中松の家
の門灯はついたままであ
ったが、四時には消えて
いた。しかし、門の格子
戸、玄関のガラス戸は開
けっぱなし、ちゃんと揃
えて脱いである運動靴が

印象的。

路地奥の勝手口の後ろ
に、整理して捨てるつも
りでした。おいた本を
積み上げ、裏から侵入で
きないようにブロックす
る。このとき右腕の肘関
節を痛め後々まで堪える。

七時四五分、中松も早

起き、すでにやってきて
ベルを鳴らす。出勤顔で
出ていき一〇分程立ち話。

中松「猫飼ってはるやる、
猫の皿や水飲み場もあつ
たし、それに猫のベット
まで……」と裏から侵入
したことを包み隠そうと
はしない。弘から「バス

の時間があるから、学校
へ電話してくれ」と切り
上げる。バス停へ東へ歩
きながらふり返ると、中
松は西の角を南に曲がっ
たので何かあるかと引っ
返す。中松も引っ返して
来て角からこちらに向っ
て走って来たのではち合

わせになる。「大学に着く時間をゆうとこと思つて」とか何とかごまかす。中松はいつも出かける前にだれかに連絡するらしい。

九時前にガス会社に電話して元栓を開けてもらう段取りをつける。また、

広国弁護士に電話して一
七時の約束をとる。

一七時、小宮総合法律
事務所でいつものように
広国弁護士に会う。経過
をまとめたものを明日の
朝にでも届けてほしいと
いわれるので、今晚は徹
夜を覚悟する。

弁護士の方にも大泉か
ら猫の件で電話があつた。
飼つてもいない野良猫、
いや、界隈の好きな人達
が餌をやっている地域猫
をだしに追い出す算段を
はじめたようである。何
の考えもなく気紛れで餌
をやっているのではない。

これ以上増えないように、
苦勞してつかまえ、自腹
を切って避妊手術をした
うえで共存共栄をはかっ
ているのである。そのよ
うな猫が裏庭や屋根伝い
に棲息している界隈でこ
そ、人間も潤いのある生
活を営める。

六月分家賃の供託書を
弁護士に預け、コンクリ
ート地獄の町へ退出する。

六月二日（水）

実家で昨晚から今までの
経過をまとめ、午前三
時に帰宅。コンビニへコ
ピーをしに行つて帰つて

くると、中松の家の格子戸は開いたままで家に電気が付いている。なかから女性の声もする。「いったいだれが……」と思つたが少し寝ておこう。

昨日から職場に中松から電話攻勢があつた模様。これは昨日「学校へ電話

してくれ」といった自分
がまいた種がたくさん実
をつけただけであるが、
事務所や同僚にたいへん
迷惑をかけた。中松が交
換を通したので、交換手
が親切にも適当なところ
に回してくれたためであ
る。何回かベルがなっ

も出ない場合には、他の
適当な部署につなぐ習慣
になっているらしい。そ
れが工学部の庶務であつ
たり、学科の事務室であ
ったり、研究室の他の部
屋であつたりした。事情
を説明してお詫びし、す
ぐ交換手とも話し、以後

工学部の天野にかかってきた電話は呼びぱっなしにしておくようにたのむ。

一三時頃、中松やってきて水まきをしながら、ベルを鳴らし「今日はく今日はく」と叫び、一五分もしないうちに車でどこかへ去る。

夕食の準備にかかろう
としたとき、ガスが再度
出ないことに気付く。実
家からブタンガスのボン
ベとそれ用のコンロ_ニホ
ース_ニを借りる。以後
たいへん重宝する。

六月三日（木）

年休をとる。というの
は、三軒の借家が建つて
いる土地の登記上の所有
者である元岩明の要請で、
周辺の測量が行われると
聞いていたからである。
どんな人たちがやってく
るかそれをじっくりと見

ておこうと思つたからである。赤茶の作業服を着た市の測量士三名、灰青色のスーツにネクタイをした元岩本人らしき人物とうすい青色の作業服の元岩側の測量士二名、茶色のズボンに白いシャツを着た買い主らしき人物、

近所の関係者数名、イチ
イハウジング小田正幸。
一三時三〇分から一五時
四〇分まで二階から見守
っていた。どうも相続に
絡んで全体を二分するら
しい。「……分筆……」と
いうのを耳にはさんだ。
そのこと自体私たちに関

係はない。それ相應の礼儀と代償があれば事はすんなりと運んだものを。世の中けっこう意固地になる人もいるんだから。二〇時三〇分 中松がやってきて、わが家のベルを鳴らし「今晚はく今晚はく」と呼んでから、

返事がなかつたので路地
に入つて勝手口を押すが
開きはしない。ガスのメ
ータのある辺りで立ち止
まっている。元栓は閉ま
つたまま、「天野さん、困
てるやるな」と北叟笑ん
でいることだろう。

六月四日（金）

午前一時三〇分 二階
まで明りが灯っている。

五時には門灯だけになっ
ていた。例の音楽はもう
ない。

いつもより早めの七時
前に出勤する。

七時三〇分 家にやっ

てきた中松に「もう出か
けた、夕方七時半に帰る」
とジゼルが返答。

一〇時前に何度か机上
の電話のベルが鳴ったが、
受話器を取ったり取らな
かったり。通常一〇時前
に仕事は始めていないか
ら、電話にだれも出ない

のは普通のことである。
いつもより早めの一八時
に帰宅し、一九時頃に中
松につかまる。駐車場の
件で一〇分ほど押し問答。
家に入って夕食中に「天
野さくん 天野さくん」
と何度もベルをならし、
おちおち食事もできない。

合間をぬって脱出、下鴨
神社まで散歩した後、実家
で話し込む。

一一時頃に帰宅する。中
松の家は煌々と明りが灯
り軍歌が鳴り響いている。

六月五日（土）

朝七時四〇分から八時

三〇分頃まで小一時間、ベルを鳴らし「天野さくらん留守ですか」と叫び、路地に入って外壁の波トタンをバリバリこする、といったことをほとんど休みなく繰り返す。二階で拝見していたが、最後にベルを押し二階の窓を

ちらつと見て下鴨本通へ
向い北へ曲がる。

ゆっくり週末を過ごした
め友達の家泊る。

六月六日（日）

八時頃に帰宅すると、
やってきて水をまいた跡

があつた。外へ出た時、
下鴨本通からこちらへ来
る中松とはち合わせにな
る。「いたんか。どこへい
くんや」とけげんな顔し
たが、駐車場の件でしつ
こく言いがかりをつけて
くる。邪魔くさくなつて
「明日、九時に弁護士事

務所でけりをつけよう」
とうっちやる。これが災
いのもととなった。今日
も外泊。

六月七日（月）

七時半にわが家にいつ
たん戻ってから弁護士事
務所に行く。八時四五分

に弁護士事務所のある吉
岡ビルに着き、九時一分
前にエレベーターに乗り九
時きっかりに事務所のド
アをノックする。思った
通り広国弁護士はまだ出
勤されていない。事務所
の女性に中松が駐車場の
ことでやって来るかもし

れないことを伝え九時五分に退出する。このときは実際に彼がやって来るとは思わなかった。意外なことに大泉に伴われて九時一五分に事務所に現われたという。今回の件に関しては大泉は何の関係もないはずである。

立て前上は隣同士の問題
であり、大泉が口をはさ
む筋はない。大泉の尻尾
をつかんだことになるが、
少々やかいなことにな
った。

広国弁護士に会えなか
った彼らは、夕方の五時
に約束をとった。弘はこ

れについては何の連絡も
受けなかつたから、当然
五時に弁護士事務所にい
るはずはなかつたが、彼
らから見れば弘が約束を
二度もすつぽかしたこと
になつた。一八時半頃に
血相を変えて、わが家へ
やつてきた。たまたま実

家にジゼルの宝箱を預け
にいくところに出くわし、
引き返して家に逃げ込も
うとしたが、北と南の歩
道を別々にやってきた二
人に門前で挟みうちにな
ってしまった。格子戸に
片足を突っ込まれ、面と
むかって応対するはめに

なる。

駐車場の話は一切なかつた。要は七月末に立ち退け、それが承知できな
いなら何が起こつても知
らないぞとばかりに二時
間近くじつくり脅かされ
た。頭をうなだれたいへ
ん困つた様子で耳を傾け

ることゝ終始する。

まず猫の件を持ちだし「近所から苦情がでていゝる、白猫を飼っている証拠写真がある、猫の首が門前に二つ三つ転がるかもしれないぞ、犬派と猫派の近所喧嘩で殺しあいになることだつてある」

次に、耳に穴のあくほ
どきかされた中国人とベ
トナム人を廻りの家に住
まわせるといふ話。

そうかと思うと、

「廻りの二軒が引越し、
更地になつたら塀もなし、
ガラス戸一枚、駐車場に
もなればうるさくて住め

たもんやないぜ」と、今度は廻りの家を解体して車で攻めるといふ。

さらに弘の私生活のことを、探偵を雇って調べさせたといつて、

「近所に嫌われている。何でも知っている。島木さんが塀の上に鉄条網を

張って猫避けをされたや
ろ、おまえんとこの猫が
家の前で車に轢かれたと
ゆうやないか、盲人用信
号機設置の話がおまえ一
人の反対でつぶれたこと
など、何でも知ってる」
（猫避けの鉄条網の話や
飼い猫のピエールとポ―

ルが家の前で車にやられ
たことは本当であるが、
盲人用信号機の件に関し
ては間違って伝わってい
るようだ。盲人用信号機
について京都新聞の読者
の声蘭に投書し掲載され
たことが、何年か前にあ
ったことは事実である）。

「通勤途上が長いから注意しや、ホームから知らん奴に蹴飛ばされるかもしれへん（足で蹴飛ばす仕草入り）、ポイントポイント（もうちゃんとおさえてある）」

「女性関係も探偵に調べさした。大声でゆうたろ

か、奥さん中にいはるん
やる」

決まり文句的な

「部落解放同盟のやつら
を呼んで大声で叫ばした
るぜ。中松は田中と関係
あるんや」とか、「火事に
なっても知らんぜ、弁償
してもらわんならん」な

ども出てくる。

拳句の果て、「はよ、いつてもたれ」と中松をたきつける。中松が前に進み出たため、弘の手にしていたジゼルの宝箱が彼の二の腕に接する。「あつ、凶器もつとるやないか、おまえも何か持ってこ

い」と中松をけしかける。
中松は家から園芸用の小
さな鍬をもってきて、道
路脇にたまっている砂を
かいている。たまたま門
前をパトロールカーが通
りすぎ「おっ、ちよつと
ひっこめ」等々。
けっこう長かったが相

手も少々つかれてきた模様で、腕時計をちらちらと見始めた。この間に七月末の二百万が二百十万にアップした。二時間で十万上がるならもうちょっと我慢してみようかな。そうこうするうちに古葉もやってきて一安心。

彼の立ち会いのもとでさらに半時間ほどお説を拝聴していた。古葉にはこの弘の態度がずるずると押され気味に見えたようだ。金の件はともかく立ち退き時期については十二月末を譲らなかつた。最終的には「木曜日にま

た会う時間を決める」ために十時半から十一時の間に電話をすることでお引き取りねがった。

古葉と、彼の田舎の家のそばで起こった身勝手な鷺の駆除の話をしながら遅れた食事をしている時、公が縁側からあらわ

れる。向いの歩道をブラブラしながら彼女も様子をうかがっていたそう、近くに駐車していた大泉の乗り込んだ車を確認してくれただころ仮ナンバーの紺色の車であった。大泉の顔を見たくて車の中をチラッと見るが暗く

てはつきり見えない。次の角を右に曲がったところで様子を伺っていると、彼もすぐ発車し、同じように右に曲がりそばを通り過ぎていった。

中松氏相手に孤軍奮闘

六月八日（火）

五時 フランスへ避難

のため予定を早めて、ジ
ゼルはMK乗合いタクシ
ーで関西空港へ出発。中
松の動きなし。門灯つけ
っぱなし、音楽鳴りっぱ

なし、格子戸あけっぱなし。
し。

六月九日（水）

イチイハウジング休み

（通常、不動産屋は水曜

日が休み）

夜十時にひと筋北にある
実家からもどったとき、

門灯と一階と二階の電灯
がつけっぱなし、音楽は
鳴りっぱなし、格子戸あ
けっぱなしであつた。

六月一日（木）

夕方七時ごろ、中松
水をまきながらうるうる。
門の東側のスペースにお

いてあつた私たちの自転
車と植木鉢を西側に寄せ
て、自分の車を、駐車さ
せていた。

妹の公が中松の車のナ
ンバーを確認に行った夜
の八時三〇分には、植木
鉢が門の前に、自転車
がウバメガシの垣根の前に

移動されており、完全に私たちが使っていたスペースを自分のものにしていた。

六月一日（金）

朝四時三〇分 駐車場の写真をとる。

六時〇〇分 起床、再

度写真をとっているところ
に中松が現われる。「契
約して、金を払った、広
国弁護士にも伝えた」

八時一五分 出かける
時、中松と大泉が西から
わが家の前を通るのを、
格子戸の後から、かがん
だ状態で目撃する。彼等

は気がつかなかつた。

八時五〇分 公、中松
と大泉の二人が、まじめ
に駐車スペースを掃除し
ているのを見かける。

一一時二〇分頃 公、
わが家の格子戸が開けら
れているのを発見。また
太い木の切り株が転がっ

ていた。あとでわかったことは、この切り株は路地奥の便所の前の木を切ったもので、島木さんも腹をたてておられた。アジサイの地植えも切られたそうで、抗議したところ「すみません」ですまされたそうである。

二〇時五〇分 わが家の格子戸を閉め、自転車のワイヤーの鍵でロックする。この頃は家の中に彼等が入るのを恐れていたが、実は、彼等は私たちの家に入りたかったのではない、私たちを中へ入れたくなかったよう

ある。冷静に考えれば当然のこと、私たちが鍵を強化する必要はなく、彼等がそれをやってくれ
ることになる。

六月一二日（土）

朝六時頃 中松たき火
を始める。

七時頃 ベルを鳴らし、
「天野さん、朝はよから
すみません……留守で
すか」と叫ぶ。

八時三〇分頃まで二階
の窓から見張っている。
外出したようなので、弘
の黒色の自転車を庭に入
れ、実家へ行く。ジゼル

の自転車は友達の家
に置いたまま、緑の
壊れかかったのは
そのまま門の前に
ほっておく。

十時頃 実家から返
てきて電話をかけよ
うとするが、つな
がらない。外の電
話線を見たらきれ
いに切つてあつた。
すぐ携

帯電話を買いに行く。

十二時頃、中松が掃除をして、いるのを下鴨本通から見かける。わが家の前の様子は昨日とは違い、火鉢を利用した大きい植木鉢二つを門の前に移し、出入りをしにくくしている。

六月一三日（日）

朝六時三〇分 中松、
格子戸からわが家をのぞ
き、路地奥へ入る。便所
の窓を開けて何をするか
見ようとしたとき、お互
いの顔が会う。
中松「車をとめている。
伐らはった葉、ほったら

かしにしたはるんで、腐
るから燃やした。昨日：
：」

弘「しよんべん、してる
んやけど：：」と行って
窓を閉めて家の中から様
子を見ている。八時頃、
中松いなくなる。

ブロック塀をおおって

いたツタがすっかりなくなっているのに気付く。
前々日十一日の仕業か？

六月一四日（月）

朝六時頃 中松、格子
戸からわが家をのぞき、
焚き火。七時三〇分「天
野さん、天野さん、留守

ですか」とさけび、路地のトタンをバリバと引つ掻く。八時頃、下鴨本通の方向に出かけていなくなる。

電話線を切られたことについて、下鴨警察署に器物損壊の被害届けを出しに行く。まず、電話線

がN T Tのものではなく
私物であることを納得さ
せるのに一苦勞、犯人の
心あたりを書く段になっ
て、民事関連であること
が先方にわかって「そん
なら、七月に立ち退けば」
というアドバイスをあり
がたく拝聴する。

夕方七時頃、斜向いの家の前に白いトラックが知らない間にとまっており、それに中松が乗るところを目撃する。家の前に赤いコードとペンキの缶が置いてあるのにも気づく。彼はすぐに西から歩いて帰ってくる。ベル

をならし、「留守ですか」
とさけびトタンをガリガ
リとこする。返事をしな
いので留守であると信じ
て、ブロック塀にドリル
で穴をあけ、ベニヤ板を
打ちつける。終わったこ
ろに大泉が濃い紺色のベ
ンツで現われる（運転手

付京三四 た二四六八。

中松にペンキの缶を持たして、何やらそのベニヤ板に書いているようすだが、二階の窓からは何を書いているかはかわからない。夕闇がせまり、懐中電灯の灯がちらちらとし、蛍が乱舞する趣に

なってきた。小一時間ほどしてやっと終わり、三人別々に三台の車（ベンツ、三菱ミニカブ、トラック）で退散。外はすでに真暗くなっていた。

すぐ降りて見に行くと『中松専用駐車場 他のも物の一切立入を禁ず 金

弐萬 立入た場合 円の
罰金 申し受ける』と読
めた。『申し受ける』だけ
はベニヤ板に入りきらず
ブロック塀にはみ出てい
る。ブロック塀のツタを
すっかり切ってしまった
のは、このためであった
と納得。

六月一五日（火）

六時過ぎ中松現われ、
前夜と変わりないことを
確認して、どこかに駐車
していた車を取りにいつ
て「中松専用駐車場」に
入れる。例によつて、焚
き火をしながら路地奥と
わが家を偵察。車に足を

かけブロック塀の上から
室内ものぞこうとしてい
るが、おそらく簾のため
に中は見えていない。

七時頃、「天野さくん」

と叫んで出発。七時半、
弘も「中松専用駐車場」
の写真を撮ってから神戸
へ出発。

十時半ごろに、三度も
中松から大学に電話あり。
学生のふりをして「天野
先生はいらっしゃいませ
ん」と答える。

昼前の十一時頃、つい
に、中松と大泉が二度も
実家に現われる。最初は
中松一人が

「猫のことで天野さんに話がある。会いたいんやけど、連絡がとれへん。ここに来たはらへんか」と尋ねてくる。公が「会ったら中松さんに連絡するようについてあげる」

「姉さんとか、親類と違

うんか」

「私は永田、事情がある身、それは聞かないで」

「親類かなんかと思ったんやけど……」

とごまかされておとなしく帰る。しばらくして中松、大泉につれられてもう一度やってくる。今度

は大泉がベラベラとまく
したてる。大泉は

「共産党やる」

「あれは近所の嫌われ者
や」

「前からここが実家とわ
かっている」

と弘の悪口をさんざん垂
れ、中松に向って

「ここにいるのはわかっているから、毎晩来たれ」

「神戸へ行つたれ」

「玄関のガラスわって入つたれ、借家やし、ガラスはあいつのもんと違う」等々脅しをかけてくる。これで妹が怖がったの兄を説得すると思つたの

だろう。そうは問屋が卸
さない。一段落付いたと
ころで公が

「あんたは、中松さんの
お友達ですか」

「不動産や」。

今度は公が、大泉のこと
をぼろくそにいつて道ま
で追い出す。二人ともど

うしようもなく帰って
いく。

公は向いの家のおっ
ちゃんに、大泉が「毎
晩来たれ」といった
ので、「来たら顔を
見せて」とたむ。
おっちゃんは、すぐ
電話で大泉の身元を
調べさせる。あつと
いうまに

『××ちゃんの知り合い
の……の妹のむこさん』
とかであると判明したの
には、びっくり。「本人は
やくざではない。後ろに
ひかえているが、こわい
ことはない」との意見で
あった。三木実と中松聖
二についてはなにもわか

らなかつた。三木実は実在の人物か？

弘は夜「すずめの学校」の事務所へ行って話を聞いてもらう。部落解放同盟に差別発言のあったことを伝える、ペン型録音器を借りる、江崎さんの八畳の納屋が借りられる、

アパートは三万九千円で
不動産家に出しているが、
相談してもいい、先生の
組合の火災保険が安くて
便利、飯間君が昔借りて
いた部屋があるので、
渡辺商事から借りた、な
どなど。

六月一六日（水）

不動産屋も地上げやさ
んも休み。

六月一七日（木）

中松、現われず。

部落解放同盟の示唆で、
京都市の同和対策室に電
話をし、大泉の差別発言

について訴える。さんざん説明して、やっとその事実を記録にとつてもらい、どう処理するか検討しその結果を知らせるということになる。返事をもらったのは一カ月後。便所の窓を板で防ぐ。火災保険に入る。広国弁

護士が三木実に抗議した
内容証明郵便の写しをも
らう。

夜、わが家に帰ったと
き、中松のポストに「永
田さんから聞いたんやけ
ど、猫のことで迷惑かけ
てるそうやけど、ノラ猫
にエサをやるのは止める

所存です」という内容の
メモを入れてやる。

六月一八日（金）

朝六時三八分 中松出

勤。ポストのなかの手紙
を見る。わが家と実家を
行ったり来たりし、公は、
四回もインターホーンで

猫の文句を聞かされる。

中松 「猫がギャーア、ギャーアいって困っている。

天野さんに会えへんかったら神戸へいかんならん」

公 「保健所か町内会長のところにいいに行ったらどう」

昼十二時半頃 自転車

の鍵で閉めていた格子戸
が二〇センチ程こじ開け
られているのに、公が気
付き、夕刻五時ごろに弘
が元にもどす。後で気が
付いたのだが、こじ開け
たのは家に入ろうとした
のではなく、「あけられる

ぞ」というおどかしであ
って、だから元に戻さず
そのままにしてあるとい
うこと。いろいろなこと
で、やったことの証拠を
わざわざ残しているのは、
おどしの意味である。そ
のいい例が、路地奥の便
所のガラス窓である。内

側に板を打ち付けた後も
二度もこじ開けそのまま
放置している。あまり強
くこじ開けようとしたの
で木の枠がはずれてしま
った。

六月一九日（土）雨

朝六時三〇分 中松出

勤。

七時過ぎ、「天野さん、
天野さん、天野さん」
と特別に大きな声で叫び
ながら格子戸にクギをう
つ。

六時半から八時までの
間に実家へ三度行った。
最初に来た時に「朝のう

ちは、インターホンは切る」と通告し、以後朝のうちにはインターホンは切っておく。

中松、八時五四分に車で出発。

十一時 「クギ付けにされて外へ出られない」と実家から派出所に電話

連絡。昼飯を食べてから
一三時ごろ二人のお巡り
さんがやってくる。公が
外にいて、弘はブロック
塀の内側から対応する。
年のいったほうのお巡り
さんが「ペンチかし、ク
ギぬいたげる」という対
応にばかりしくなつて、

弘「結構です」。被害届けは受け付けてくれない。

一五時頃、古葉が家にやってきたが、留守だった。たので実家に寄る。その後、あとで大泉と中松の乗ったベンツにあとをつけれ「何でつけるのか」と詰問。両人引き下がる。

一五時一五分に、わが
家にもどってきて、留守
を確認後、大きな植木鉢
を二人で門のステップの
上に持ち上げ、いったん
出発。弘はこのとき家の
なかで荷作りをしていた
が、彼らがトタンをガリ
ガリこすったのですぐ気

付く。すぐ戻ってきて路地奥へ入る。二階の窓から二人が話しているのを聞き、中松のスキンヘッドを見る。このとき便所の窓に板が打ち付けてあるのに気付いたようで、窓を少しこじ開けそのすき間から何かで板をトン

トンとたたたく音がした。
こじ開けたすき間はその
ままにして帰った。

一五時二〇分〜二五分
中松が実家に現われ玄関
の戸をたたき、庭に入り
部屋のなかをうかがう。

六月二〇日（日）

六時五五分 中松出勤。

七時一五分 二階の窓

から見ていた弘の目の前

に朝日に照らされたスキ

ンヘッドが又くと現われ、

すぐ消える。中松がブロ

ック塀に登って三枚の簾

を取りはらっていた。

七時一九分 焚き火を
始める。

七時二五分〜四五分の
間に「おはようございま
す」と言いながらベルを
鳴らす。返事がなかった
ので、格子戸にネジを三
本ねじ込む。門のステッ
プの上ある植木鉢のキョ

ウチクトウの赤い花が、
風もないのにリズムカ
ルにゆれている。

八時の九分 音楽のス
イツチを入れ、車で出発。

この間に四度ほど実家に
行った中松は「天野さ
ん、いるのはわかってい
る。出てこ〜い」と叫ん

でいたとのこと。

一四時二〇分から一五時三四分までに次のようなことが起こったのを、実家の二階の公の部屋から見ていた。

まず中松がやってきて、実家のインターホンで公と七、八分も猫の話を

する。中松「エサやっ
はったから、住みついた。
今さらやらへんのはこち
らが困る。魚くわえてい
った。エサやらへんのは
かわいそうや。人道に反
する。ここに連れてくる
からエサやってくれ」(な
んのこと?)

早朝は公が寝ているの
で実家のインターホーン
のスイッチは切つてある
が、昼間、公がいるとき
はスイッチが入っていて、
適当に相手になることに
してある。私なら相手の
顔を見ないで、立ったま
ま外でインターホーンに

向って話すときみじめな気が。
持ちになり、すぐやめる

中松が実家を出たところ
で、向いのおっちゃん
が顔を見せ、「スキンヘッ
ドでそのうえ眉毛をそつ
たやつに、顔をじろつと
見られて、だまっでられ

るか」と話しかけ、「近所に迷惑かけるな」ということでしばし言い合いになる。中松、おっちゃんにいいまかされて下鴨本通の方へ戻る。

ちようど近所のだんなさんがそれを目撃し、奥さんに「中松とおっちゃん

んがもめている」と告げたので、奥さんが帰っていく中松の後をつけてくれる。下鴨本通に駐車していた濃紺のベンツに乗った男と中松が話しているのを見る。

中松が引きあげたすぐ後に、おっちゃんが実家

にやっ
てきて、
公から、
今までの
ことや、
これか
らどうす
るつもり
かを聞
く。その
結果、大
泉や中
松が、実
家へやっ
てきて
うるさく
する場合
は、近
所のもの
としてお
つちや
んも文句
をいって
追いつ
すが、「お
にいちゃん
のこ

とは、おにいちゃんの考
えもあるので、おっちゃ
んに頼むつもりはない」
ということでした。

おっちゃんが、実家か
ら帰ろうとしていたとき、
中松がおっちゃんの家の
インターホーンを押して
いた。おそらくベントツで

待っていた大泉にいわれ
て、またやってきたので
あるう。またまた中松と
おっちゃんがいいあいに
なつて、「帰れ、帰れ、
：」とおっちゃんに一方
的にいわれて、中松何も
いえずに帰るが、未練が
ましく少ししたつてから、

また実家のインタ―ホ―
ンを鳴らす。公「インタ
―ホ―ンは切る」とい
とすぐ帰る。

この後、夕方わが家を
見に行った公が、ウバメ
ガシとツツジが伐採され
ているのを発見。切り株
や切葉に埋もれた植木鉢

を公がいくつか救い出し、
実家に運ぶ。このとき郵便箱の「天野 弘、ジゼル」の名札がはがされて
いるのに気付く。

夜二〇時には久しぶりに、
中松の家の電灯が
明々となついていた。

六月二一日（月）

六時二七分 中松出勤
六時三八分〜四三分まで
ネジを西側の格子戸にも
ねじ込む。

今日は家の中にいない
と思っっている様子で中を
のぞこうとはしない。そ
の代わり、実家へ七時か

ら小一時間の間に三回も
見にいっている。

七時五六分 車で出発
するとき駐車場にほった
らかしていたツタを車の
下にひっかけ、長いツタ
のつるを引っぱりながら
北泉通を西に向う。すぐ
気がつき、バックして西

隣の家のがレージの前に
停車し、家からほうきと
ちりとりをもつてきて、
彼のていねいなやりかた
で道の真ん中を掃除し始
める。途中で他人のがレ
ージの前に車を停めてい
ることに気付いて、自分
の家の前に移動させた。

一九時〜一九時四五分
広国弁護士と相談。弁護
士さんのところに送って
きた、わが家の縁の下に
すわっている白猫、エサ
の皿、水のみ場、猫のベ
ットを写した写真、なら
びに駐車場の契約書（月
一万五千円）をみせられ

る。

夜の十時に中松、実家のインターホーンを押す。

中松「天野さん、帰った
らへん？」

公「へく、何のこと」

公は、天野さんは実家に
来るかもしれないが、こ
こに帰るといふのはおか

しいから、質問の意味が
わからないふりをする。

六月二二日（火）

六時二十七分 中松出勤。
家の中をうかがったあと、
長靴にはき替え、車を洗
い始める。

七時三五分 車で出発。

実家には一回見に行った。
夜九時二〇分 中松、実
家にやってきて公とイン
ターホーンで話す。

中松「さっき、この辺で
見かけたんやけどな。弁
護士さんところへ、行って
きた」

公「へー、弁護士って

何のこと」

中松「聞いてはらへんの」
地上げのことなど詳しい
事情を公は何も知らない、
ということにしている。
中松は、この頃は弘が実
家に住んでいると思うよ
うになった。半分は正し
い。週の何日かは実家で

夕食をし、風呂嫌いなのにほとんど毎日風呂に入り、一〇時過ぎにわが家に寝に帰っていた。これはなにも特別なことではなく、ジゼルがフランスに行っている時の弘のごく普通の生活である。

六月二三日（水）

六時三四分 中松出勤。

いつものパターンで、わが家と実家を行ったり来りして、弘をさがしだそうとして、二階の窓から見られていることが中松にはわからない。

八時〇〇分 ウバメガ

シを伐採したため門の西側に人一人が出入りできない。大ききの穴があいていたが、中松は出発する前に、その穴を切株でふさぐ。実際、格子戸がクギとネジで開かなくされていたので、弘はその穴から出入りしていた。まだ

ブロック塀を飛び越える
必要はなかった。

八時二五分ころ神戸へ
行くため、北園町のバス
停で待っていたとき、変
な男に話しかけられる。
以前、家の前で車のなか
から私たちを監視してい
た瘦形の四〇代の男を思

い出す。

男「散髪は自分でしたは
るのか」

弘「いや、散髪やさんに
してもらっている」

男「そんな頭が、わしは
すきや。パーマ、かけて
るんか」

弘「天然パーマや」

男「ひげは、自分でそるのか」

弘「自分で、たまにそる」と普通に答えておいた。

四番の市バスが来たが、すぐあとに京都バスが来るのがわかっていたから、弘は乗るようなふりをして、彼に先をゆずり乗ら

なかつた。彼は四番に乗
つていってしまつた。

「ざまゝ見る」という気
分。

六月二十四日（木）

朝は中松現れず。昼一
回と夜二回、実家にやつ
てきた。公は不在。母に

よると、いつもより激しく勝手口の戸をたたき、庭にも入った、とのこと。大泉が一緒だったのか。

中松は大泉が一緒の時は人がかわる。古葉も同じ印象を受けている。

安全のためわが家の二九番地の郵便物はすべて

実家の六番地に届くようにする。

六月二五日（金）

六時三五分 中松の車が駐車しているのに気が付くが、中松自身が出入りするのは見落とした。

八時まで二階から見て

いたが、中松が現れなかつたので、神戸へいくために家を出る。そのとき東から中松が、ビニールの傘をさしながらインスタントラーメンがいつぱい入ったコンビニの袋をぶらさげてやってくるのが目にはいる。無視して

西へ歩いていったが、「天野さん、天野さん」と彼も気が付いて呼びかけるので、しかたなく立ち止まって話す。またまた猫の話。もううんざり、雨が強くなってきたので彼の傘に入れてもらって、しばし相手になる。彼も

急でるようで、私も神戸へ行かなければならない、だいたい神戸に泊まっついて、週末に戻ってくるというようなことにおわし別れる。

中松、朝、昼それぞれ一度、実家へやっってきた。

夜には「ここに寄ると云

つてはった」との口実で
二度もやってくる。夜の
一〇時二〇分にまだ車が
駐車してあり、家には電
灯が明々とついていた。

今夜は友達の家に泊ま
る。

六月二十六日（土）

朝に一度、中松は実家にやってくる。公によると、一時過ぎまだ車はあつたが中松の姿は見られなかつたという。

友人宅で一日のんびり本を読んでいた。雨、雨、
…。

夜、実家で食事をして
風呂に入つて一〇時過ぎ
に家にトイレの掃除をし
に寄る。二階から中松を
毎朝見ているときに、携
帯トイレを二階において、
うんこをしていたのだが、
昨日はあわてて出かけた
ので捨てるのを忘れてい

た。今日も友達の家泊
まる予定であつたが、う
んこの始末のためわが家
に立ち寄らなければなら
なかつたのである。帰つ
てみると、いつも出入り
していたウバメガシを切
つた後にできていた隙間
がベニヤ板で完全にふさ

がれていて入れない。し
ようがないのでブロック
塀を乗り越えて入る。ト
イレを始末し、友達の家
へ泊まりに行く。これか
ら何日かブロック塀を乗
り越えて家に入ることが
続く。家の中から外へ飛
び降りるときけっこうシ

ヨックがあり、何回か飛び降りているうちに右足のひざの関節をいためる。階段を上がる時特にひどい。

六月二十七日（日）

雨、雨、雨、……。こ
やみになった昼前に友達

の家を出る。いずみやで
お寿司を買って家で食べ
るつもりで帰る。ブロッ
ク塀を越え家の中に入る
うとしたが、玄関の戸が
開かない、縁側のガラス
戸も開かない。よく見る
と、玄関には四つの南京
錠が、ガラス戸には二本

のネジがねじ込まれてい
た。板塀に登って二階の
窓から入り、お寿司を食
べながらどうするか考え
る。

△ good idea! ガラス
戸の西側の一本を短いネ
ジに交換すれば、見ただ
けでは何の変化もないが、

ガラス戸は開けられる。
すぐに実家にいってドラ
イバーを借りて実行。
五時に警察を呼ぶ。「帰
ってきたら、家にはいる
ことができないからすぐ
来てくれ」と一一〇番。
二人のお巡りさんがバイ
クでやってくる。事情を

説明し、中松がやったに
違いないと主張する。二
人のお巡りさんはいった
ん下鴨警察署の刑事課に
どうするかを聞きに行く。
実家で待つ。しばらくし
て住居侵入に間違いはな
いからと、現場の写真を
とって、被害届を受け付

けてくれる。彼の車は駐
車したままであつたが、
中松本人は不在。警察は
中松から話を聞くことは
できなかつたし、彼をわ
ざわざ探すことはないだ
ろう。錠やクギ、ネジな
ど一つ一つバラバラに見
れば、いたずらに毛のは

えた程度のことであり、
捜査するほどの事件では
ない。以前電話線を切ら
れたときに、下鴨警察署
の刑事課の部屋で被害届
けを書いてもらっていた
ときの部屋のあわただし
さを思い出す。手錠をは
められた女の人が引っぱ

られてきたり、〇年〇月
の殺人事件の書類一式と
書いた段ボール箱が無造
作に放り出してあるのを
見ると、しかたがない思
いもする。

六月二八日（月）

朝七時前に実家に下鴨

警察署から電話がある。

「昨日作成した被害届に不備な点があるから、書きなおしていただきました。先生はまだいらっしやるか。もしそうなら、すぐそちらに行く」

すぐ公から連絡があり、中松に出くわす心配はあ

ったが、ブロック塀を飛び越えて実家へいそぐ。家の中で被害届を書いているとき、見張りをたのんだお巡りさんが、中松が実家へやってくるのを見つける。中松はあわてて引っ返したもよう。珍しく赤いポイントが袖口

に入っただ白のT・シャツ
に黒のショートパンツ。
いつもはメンパンに青か
草色のポロシャツを順番
に着ていたのに今日は違
う。中松さんには似合わ
ないスタイルである。雨
続きで洗濯物が乾かない
のは気の毒。

七時四五分 中松こり
もせず実家にやってきて

「永田さくん、永田さく
ん」と呼ぶ。こちらは無
視。

八時二〇分 あきらめ
て帰るのを近所の人が見
とどけてくれた。

九時 実家よりブロッ

ク塀を飛び越えて自分の家の門内に入ると、縁側のガラス戸のネジがさらに四本増やされていた。幸いドライバーを持っていたので簡単にはずせた。西側の二本を短いネジにかえる。玄関の南京錠もドライバーで簡単にはず

せることを確認してから
もとに戻しておく。まっ
たく同じタイプのものを
買ってきて付け替えれば
おもしろかるう。一カ月
後に実行。今はそのまま
にしておく。その方が、
「困ってどうしようもな
い、かわいそうな天野さ

ん、もうそろそろ出てい
きますね」と相手を安心
させることになるのでは
ないだろうか。それにク
ギやネジや錠をはずして
も、またすぐやるにちが
いない。以前、ガスの元
栓を閉められたが、開け
るとすぐ閉める。コック

を閉めるのは簡単である
が、開けるときには梯子
を使って、高いところに
ある安全ボタンを押さな
ければならない。こんな
面倒なことを繰り返すよ
り、「ホースノン」で済ま
すことにした。このゲー
ム長引きそうだから、で

きるだけエネルギーを使
わないでおこう。

夜の一時過ぎ、偵察
にいった公が道角で、実
家へいく中松とはち合わ
せになる。

公から「いや〜」と声を
かけると、

中松「弁護士……」

と云うので、

公「猫のことで弁護士た
のまはったん」

と笑うと、

中松「違うがな、天野氏
が……」

公はコンビニへいくと
いって別れる。中松も引
っ返して下鴨本通を南の

方へ去っていった。

六月二十九日（火）

六時三五分 中松歩いて出勤。車は二五日の金曜日から置いたまま。

六時四〇分 スニーカーをゴムの長靴にはき替える。車を利用してブ

ツク塀越しに家のなかを
うかがう。縁側のガラス
戸のクギとネジがあるか
を確かめたのかもしれな
い。その後、八時半すぎ
まで実家とわが家の間を
行ったり来たり。

「いったい天野さんはど
こにいたのでしょうか、

クギとネジはそのままだし、家にかえっているはずはないが、実家にもいる様子もないし」

七時半頃 一丁目と下鴨本通のフレンズ・フーズ側の角で、傘をさして、しゃがんでいるのを近所の人が見つける。そこか

らなら、一丁目の実家か
ら出かけるかもしれない
弘と、わが家から北園町
のバス停に向う弘を見張
ることができると。なんと
健気なことか。

八時二五分 もどつて
きて、一瞬、二階の窓を
見る。注意、注意！

八時二十九分 家をじつくりとながめ、深く考え
た後スニーカーを手にも
って歩いて出かける。

九時すぎ、どしやぶりの雨のなかを、自転車で
家財道具を置く下宿を探
しに出かける。十一畳の
安い部屋が出町の不動産

屋に出ていたので、まずそこに行く。「学生さんやないとかかん。保証人もいる」とことわられる。他にないか調べてもらうが、三万以下のはない。顔見知りの「えびす」へいくことにする。すごい雨。やくたたたずの傘をさ

して、坂を自転車で登る。
さいわい、あの親切なお
ばさんが新聞を読んでい
た。事情を説明して、近
くの下宿に案内してもら
う。木造の一九五〇年代
のアパート。場所は、今
出川通の北白川バス停を
ちよつと東へいった北側

のバ―と料理屋に挟まれた路地奥。二万四千元＋二千元（共益費）一畳半＋十三畳＋四畳半＋押入、全部で一四平米。「神戸大学の先生に保証人はいらへん」と信用してくれ、すぐに決める。雨のなかをあちこち探すのはしん

どい。七月に荷物を運び込む場所と大泉と「中松さん」のいない世界が絶対必要、息抜きの空間があれば、このゲームはただ続けられる。

六月三〇日（水）

七時〇一分 中松、西

から歩いて出勤。昨日と
まったく同じ行動パター
ン。雨続きで好きなたき
火もできなく、退屈そう。

八時〇〇分 実家で
「永田さん」と叫びなが
ら戸をたたいたあと、そ
のまま車を置いて徒歩で
南へ去る。今日は一時間

だけであきらめた様子。

今日は水曜日で、中松
が帰ってからは特に変わ
ったこともなく六月が終
わる。七月分の家賃を法
務局へ供託する。